

## Tao Jingsun's *The Watch*: A Japanese translation and comments

NAKAMURA Midori

### Abstract

This paper includes a Japanese translation of Tao Jingsun's short novel, *The Watch*, as well as comments on the novel. *The Watch* was written around 1925, when Tao was studying in Japan. As a general rule, most modernist Chinese literature cannot be separated from the political, ethnic, and national issues that dominated the Republic of China between 1912 and 1949. Compared to other writers, however, Tao Jingsun produced literary work that was genuinely unique. His Chinese people in the novel often cross borders, not just the ethnic and national borders that separate China from Japan, but also the borders of gender. They live in a borderless world.



# 陶晶孫「腕時計」

## —翻訳と解説

中村みどり

### 【翻訳】

電報を受け取つたけれども、しかし結局のところ彼女は駅まで行く気にはなれず、朝食をとるとすぐにベッドにもぐり込み、横になつた。

何度も視線を向ける腕の時計は、女ものにしては大き過ぎ、男ものにしては小さ過ぎる。

「まだ九時ね。」

なぜか近頃、彼女は気がめいつて仕方がない。今回Fに単身赴任中の夫が帰つてくるというのに、迎えに行く気になれなかつた。

布団のなかで気だるい身体をガサゴソと動かし、片方の手で腕時計を握つた。

「何時の汽車で戻つてくるのかしら——」

彼女は再び腕の時計を見た。

「いいわ、あれのせいだと言えば——迎えに行かなくてもいいわ。」

銀の腕時計をまた眺めた。

「あら、私つたらずつとこの時計を眺めている。」

そう思うと、顔がさつとほてり、喉がカラカラになつた。明るいところへ顔を出しているのが恥ずかしくなり、布団のなかへもぐり込んだ。

三年前、彼女はある大学生と恋におちた。彼はP市に住んでおり、休暇になると彼女のとを訪ね、この腕時計は、ある冬休みに彼から贈られたプレゼントであつた。彼の想いが込められているだらうこの時計を、彼女は肌身離さず持つていた。でも不安は消えなかつた。春休みになつてもまだ——プロポーズはもちろんのこと——情熱的な愛の言葉さえ耳にしなかつた。——これまでに受け取つた手紙を仔細に確認すれば、一言の愛のささやきもないことに気がついたはずである。なぜだろう?——彼はP市で新しい恋人と新しい恋愛に夢中になつていたから。

こうして別れの時が訪れた。彼の不誠実をなじる手紙を書留で送り、「記念に交換した品もすべて、お互に返ししましよう。」とまで、彼女は書き込んだ。

ところが彼からは梨のつぶてであつた。実際のところ、彼にはもはや彼女と話し合ふ気はなく、「記念に交換した」——彼のところにあるただ二枚の写真は、そのまま手元に置いておくつもりのようであつた。

でも彼女の方は違つた。義理の兄夫婦の家にこれ以上身を寄せるることはできず、一刻も早く嫁に行かなければならぬ境遇にあつた。このため三か月経つた後、古い手紙の束を涙で湿らせてから、ガスコンロで燃やし、それから灰を庭に捨てた。昔撮つた一枚の写真だけは燃やすのが惜しまれたが、彼から便りのないことを思うと怒

りがこみ上げ、真つ二つに破裂してしまった。それでもまだスカートのポケットのなかに入れておいた。しかし後日、Department Store で化粧室に入り、Pocket からものを取り出す際、便器のなかに落としてしまった。

——最後にもう一度見てから捨てようと思っていたのだが。

こうして、彼女は新しい夫のもとへ嫁ぐことができた。——でも例の腕時計は捨てるのに忍びず、持参しても邪魔にはならず、また高価ではないが、少しばかりの価値ある品であつたため、自分で買ったか母親が買い与えてくれたことにしておけば差し障りはなかつた。

今、夫との生活を始めすでに一年が過ぎた。しかし一緒に暮らしたのはおおよそ六ヶ月にしかならない。彼女はTで一人の父親が残した遺産を管理し、夫は単身でFに教授として赴任したからである。家のなかはひつそりとしていたが、むしろ夫がいないため、余計な煩わしさがなかつた。ゆえにこの腕時計の由来もほとんど忘れ去り、『紅樓夢』<sup>(1)</sup>を読みふける日々を彼女は過ごしていた。

今、腕時計を見て、彼女はある出来事を思い出した。この時計を初めて目にした夜のこと。東門で電車を乗り換え、東城区へ帰る彼が彼女を家まで送つていく途中、彼女は彼の手を握り、うす暗い胡同<sup>(2)</sup>で恋人たちがするというキスをした時、その場面を警官に見られてしまつたのであつた——

「S——」

彼女は驚いて、飛び起きた。

「あら、お帰りなさい。」

「お前、何かあつたのかい？」

ドアが開き、聞こえてきたのは夫の声である。

「あ、ちょっと、あれで。大したことはないけど、それで少し頭痛がしたの。」

「そうか、それならいいんだ。迎えに来ないから、何かが起きたと思つてね。」

「本当にごめんなさい。」

「いいさ、まずは寝てなさい！」

彼女は立ち上がりと、寝間着の裾を引きずりながら、夫の外套を脱がせてあげた。

「本当に悪いところはないのかい？ 体の調子が少しよくないね。」

伸ばした両手を女の肩の上に置くと、夫はじつと彼女の顔を見つめた――。

狼狽した彼女は、顔を見られたくないなかつた。

とつさに両腕で夫の頭を抱え、大柄でいかにも鈍感そな学者の頬に何度もキスをした。

彼女は悲しかつた、なぜなら彼とのキスを思い出したから――目の前の夫はキスを理解できない人だつた。

「そうそう、論文で賞金をもらつたんだ。君はいつも家を見てくくれているから、何か買つてあげよう。そうだ、腕時計を買おう。いつもそう思つていたけれど、忘れてしまつたり、懐に余裕がなかつたりしたんだ。」

「買わなくていいわ、これで十分よ。」

「その時計はお前の姉さんのところの上の娘にあげればいい。腕時計を見たことがないから、きっと喜ぶだろう。君は金の腕時計を買えはいい。」

「でも、これはとつても時間が精確なの。」

「それ以外の時計全てが、不精確つてこともないだろう。」

「でも——」

彼女は黙った。

「君の具体がよくなつたら、T通りへ行こう。あそこで時計を見てもいい。」

彼女は知らぬ間に恋人を奪われてしまつたようである。

※陶晶孫『音樂會小曲』（上海：創造社出版部、一九二七年、上海書店影印本、一九八九年）を底本とする。

## 訳注

- (1) 曹雪芹作、清代を代表する長篇小説。大貴族の賈氏の貴公子、賈宝玉と彼を取り巻く女性たちの恋愛模様や一族の榮枯盛衰を描く。
- (2) 北方言で路地を指す。北京の胡同が代表的とされる。

## 解説

作者である陶晶孫（一八九七—一九五二、無錫出身）は、幼少期に家族とともに来日し、父親をはじめとし、姉と弟、妹もまた日本留学の経験者である。東京神田の錦華尋常小学校へ編入、のちに九州帝国大学と東北帝国大学で医学と自然科学を学んだ。専門を修めるかたわら、一九二一年に東京で結成された、中国現代文学を代表する文学団体「創造社」に参加、日本新感覺派の文体を取り入れた潇洒で都会的な感性の作品を発表する。また時代の変遷に沿い、三〇年代には上海のプロレタリア演劇運動に関わった。近年では、日本軍圧政下の戦時上海

および戦後直後の台北に関する言論活動が注目されつつある。

「創造社」のメンバーの多くは、当時中国人日本留学生であった。なかでも二十数年間日本で過ごし、さらにミッショニスクールの英語教師であった佐藤みさをとの恋愛結婚を果たした陶晶孫は、「創造社」随一の「知日派」であったと言えよう。当時中国では、五四新文化運動の前後より、西欧から導入された「自由恋愛」や「恋愛結婚」の観念が知識青年たちの間で熱烈に支持された。しかし、郭沫若や郁達夫など「創造社」を代表する作家たちの如く、厳格な家制度のもと親が取り決めた結婚を拒みきれない者も多かつた。彼らの作品では、留学先日本での妻以外の女性との恋や性的苦悩が描かれ、その苦悩は往往にして中国の民族や国家の「後進性」と結びつけて語られた。一方、陶晶孫の小説では、日本人の「支那人」に対する蔑視を意識しながらも、日本人女性との恋愛および日本の風景や文化をのびやかに享受する中国人男性主人公が登場する。そこには、家父長制や祖國と全面的に衝突することなく、比較的恵まれた留学生活を送った陶晶孫自身の体験が反映されているのであろう。さて、短篇小説「腕時計」（原題「表」）は、陶晶孫がまだ日本留学中の一九二七年に刊行された、第一創作集『音楽会小曲』（上海・創造社出版部）に収められた「短篇三章」のなかの一篇である。「短篇三章」のうち、一篇目の「絶壁」は、恋人たちが抱き合つたまま青草に覆われた崖を転がり落ちる、スリリングな瞬間を視覚的に描く。また三篇目の「胡乱と女学生」（原題「胡乱和女学生」）では、互いに好意を抱く男女の微妙な距離と心浮き立つ思いをスケッチしている。これら二篇の作品は、陶晶孫の他の作品と同様、いざれも第三者の語りを用いて、男性主人公の視点から物語が語られている。これに対して「腕時計」では、同じく第三者の語りを用いているもの、女性主人公の視点に焦点を当て、彼女の内面の起伏、すなわちかつての恋人に対する未練や夫への冷

めた気持ちが語られていく。男性たちは、以前の恋人、そして単身赴任中の夫にせよ、遠景の一部としてしか姿を現さない。なお「胡乱と女学生」の文末には、「一九二五、八、二二」と記されており、おそらく「腕時計」も含めた他の二篇もこの時期に脱稿した可能性が高い。

同時期の中国現代文学において、中国人男性作家が描く主な女性像として「男を翻弄する女」がある。先述の通り、「創造社」の作家たちの作品でも、「强国」日本の女性に対する「弱国」中国の男性性の危機が小説のモチーフの一つとなっていた。他の「創造社」の作家たちとは異なり、「腕時計」の物語の主眼は、国家やジエンダーハーの対立ではなく、女主人公が胸に秘めた心のゆらぎの記述に置かれている。そしてこの心のゆらぎこそが、名もなき彼女の日常を彩るささやかなロマンとして描かれている。また興味深いのは、「彼女」が夫を駅まで出迎えに行かない口実とする「あれ」とは、おそらく女性の月経を指していることである。このような描写は当時の男性作家としては珍しく、女性の感覚に寄り添う作者の細やかな観察眼がうかがえる。

また「短篇三章」の他の作品にも共通しているが、物語の舞台や登場人物の背景が曖昧であることも、本作品の面白さの一つである。「胡同」や『紅樓夢』という語からは、舞台は中国で登場人物も中国人のように思われるが、日本を舞台に日本人が登場しているとも、あるいは他国の話としても解釈することが可能だ。それは、日本と中国の二つの国を生きた陶晶孫が、民族や国家の枠組みの外に文学の可能性を見出していたことの表れだと考えられる。また夫以外の男性へ想いを抱き続ける「腕時計」の女主人公は、図らずも大事な写真をトイレに落としてしまったり、実際には迷惑な夫の好意を避けられなかつたりと、どこか女学生気分が抜けない、センチメンタルで不器用な女性である。このような女性主人公の像には、性別の枠を越えて、陶晶孫が描く他の作品の男

性主人公にも通じるものがある。報われぬ恋を胸に秘めた実直な男の物語である『シラノ・ド・ベルジュラック』などを愛読した<sup>(1)</sup>、当時の陶晶孫の好みとその自画像が見て取れよう。

本作品は、これまで陶晶孫の小説のなかではさほど注目されることはなかつた。しかし、つねに政治とは密接な関係を持ち続けてきた二〇世紀の中国現代文学において、彼の文学の特質を考える上で味わい深い一作として位置づけられる。なお本翻訳は、日本で紹介される初めての日本語訳となる。

## 注釈

(1) フランスのエドモン・ロスタン作の戯曲、一八九七年に初演。醜い容貌であるが文武ともに才能豊かな剣客、シラノ・ド・ベルジュラックの報われぬ恋を描く。同戯曲は陶晶孫の愛読書であり、『音樂會小曲』に収められた短篇小説「理學士」では、フランス語原文の「フレーズ」が引用されている。

## 【附記】

二〇号館の廊下で顔を合わせるたび、朝でも昼でも夜でも、山口ヨシ子先生は、中国語学科の私にも気さくに挨拶をして下さり、また必ずウイットに富んだ気遣いの言葉をかけて下さつた。また学務の場だけではなく、学内の「〈身体〉とジエンダー研究会」においても、先生の包容力あるお人柄から学ばせていただいたことは実際に多い。短い間ではあつたが、職場でご一緒させていただいたことは、私にとって非常に幸運であった。ご退職後の山口ヨシ子先生のご健康と研究面での一層のご発展をごころよりお祈り申し上げます。